



説教要旨「救い主を待ち望み」

エレミヤ書 33章 14～16節

ヤコブの手紙 5章 7～11節

何が正しい情報なのか、どうするのが正解なのか。それがはっきりとはわからない中で選択を迫られる。預言者エレミヤの時代、イスラエルの民もそのような状況に置かれていました。

この頃のユダ王国は、新バビロニアとエジプトという二つの大国に挟まれて滅亡の危機にありました。その狭間でなんとか生きながらえている状態です。ユダ王国のエホヤキム王は、エジプトが劣勢とみて新バビロニアにつきましたが、たった3年でエジプト側に寝返ってしまいます。これに怒った新バビロニアはエルサレムを攻め落とし、王を捕らえて連れて行ってしまいました。ユダ王国には新しい王様が立てられて、新バビロニアの属国として存続しましたが、ユダ王国の人々は新バビロニア支配への不満が渦巻いていたのです。そうした中でエレミヤは「わたしたちが神に背いたために、神は新バビロニアを用いてこの国を滅ぼされる」と預言したのです。

結局、ユダ王国は新バビロニアに反旗を翻し、これに怒った新バビロニアの王様は、再びエルサレムに攻めてきて、今度こそ完膚なきまでに滅ぼし尽くし、ユダ王国は滅亡したのでした。

エレミヤのエルサレムが滅亡するという預言はこうして実現しました。けれどもエレミヤの預言は、決して滅びの預言だけではありませんでした。「確かに、国は滅びる。けれどもそれは、神に見放された結果ではない。神様は救いの約束を必ず果たされる」。それがエレミヤの語った預言です。

イエス様は十字架の上で、今にも息を引き取ろうというそのときに言われました。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつてのですか」(マル15:34)

絶望を味わい尽くされたイエス様の姿が、そこには描かれています。けれども神様は、その絶望をそのまま終わらせはされなかった。…3日目に、イエス様を復活させられたのです。

今日からアドベント、1年の中で1番夜が長い季節です。右も左もわからない真っ暗闇のこの世界に、希望の光が訪れるのです。

(2022・11・27 説教者：稲垣真実)